

しめ縄 (注連縄)



神社を訪れた時、神社の前や、ご神体を取り囲むように下げられている、ギザギザの白い紙が吊されたよじった縄にお気づきになることと思います。これは、しめ縄と呼ばれ、米わらをよじて作った縄です。それらは神聖と考えられる場所に張られ邪気や病気を防ぐ力があると伝統的に信じられています。神域と現世を隔

てる結界の役割をするわけです。

その大きさ、形は様々です。直径 5 センチくらいの小さなものから、出雲大社神楽殿に見られるように、周囲 4m、長さ 13m、重さ 5t、日本一の大注連縄まで、様々な大きさがあります。また、形も、両端が細くなっているもの（大根締め）、片方だけ細いもの（ゴボウ締め）、端から端まで同じ太さのものと同様です。



・起源

一説に依ると、紀記説話の中の「天岩戸（あまのいわと）伝説」にまでさかのぼるともいわれます。「天岩戸伝説」とは、太陽の女神天照大神（あまてらすおおみかみ）が天の岩戸の中に籠ってしまわれたとき、これを引き出すべく神々が協議して、天鈿女命（あまのうずめのみこと）が岩戸の前で乱舞しました。これがあまりに滑稽だったので、外の神々は大騒ぎとなり、不審に思った天照大神が岩戸をそっと開けました。その時とばかりに手力男命（たちからおのみこと）が岩戸をこじあけて、女神を外に連れ出したというあの有名な神話ですが、天照大神が天岩戸から引き出された際、二度と天岩戸に入れないよう縄で戸を塞いだのが起源とされています。



・稲作との関わり

日本人はお米を主食にしています。稲作には水が欠かせませんので雨乞いは神に祈る最も大切な儀式だったという過去の名残をしめ縄に見ることが出来ます。

しめ縄は和紙をジグザクに折った「紙垂(しで)」とワラを束ねて垂らした「メの子」を交互に下げたのが一般的に見られます。

ワラで作った縄は雲を意味し、縄から垂れ下がった(和紙をジグザクに折った)紙垂(しで)は稲妻、そして縄から垂れ下がったワラは雨を表しています。

しめ縄には古代人の五穀豊穡を祈る願いが込められているわけです。

次回、神社を訪問された際には、是非、しめ縄にも注目してみてください。